

『今月の天候と農作業』

通巻第5605号
7月号
平成29年7月6日発行
宮崎県
宮崎地方気象台



【特に注意を要する事項】

期間の前半は気温がかなり高くなる可能性があります。

【予報のポイント】

暖かい空気に覆われやすく、向こう1か月の気温は高いでしょう。また、期間の前半は気温がかなり高くなる可能性があります。

【確率(%)】

要素	予報対象地域	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	九州南部	10	30	60
降水量	九州南部	30	40	30
日照時間	九州南部	30	40	30

【予想される向こう1か月の天候】

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

向こう1か月の平均気温は、高い確率60%です。

週別の気温は、1週目は、高い確率60%です。2週目は、高い確率60%です。

3～4週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

<1 週目の予報> 7月8日(土)～7月14日(金)

前線や湿った空気の影響で雲が広がりやすく、雨の降る日があるでしょう。

※明日から1週間の、日別の天気や気温などは、

週間天気予報 (<http://www.jma.go.jp/jp/week/>) を参照してください。

<2 週目の予報> 7月15日(土)～7月21日(金)

高気圧に覆われやすく、平年に比べ晴れの日が多いでしょう。

<3 週目から4週目の予報> 7月22日(土)～8月4日(金)

平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

普通作物

◆早期水稲

1 水管理と防除

台風の襲来時には倒伏を軽減するため深水とし、台風通過後も吹返しの高温乾燥風で収量・品質に影響が出ることがあるため、風がやむまで十分な湛水状態を保ちます。収穫前の落水は収量や品質が低下しないよう、収穫5日前とします。

カメムシやいもち病の防除を行う場合は収穫予定日を考慮し、農薬の使用期間内で行います。早期水稲ではカメムシ被害が品質低下の主な要因のため、地区防除基準を参考に周辺ほ場への薬剤飛散に注意して防除しましょう。

2 収穫と乾燥調製

収穫適期は全粒の8割が黄化した時期です。早刈りでの青未熟粒や、遅れによる胴割れ粒に注意します。収穫後は40℃以下での乾燥作業へ速やかに移行します。例年、過乾燥の玄米が多くみられるので、適正水分の14.6～15%に仕上げましょう。

◆普通期水稲

1 水管理

中干しは茎数が20本程度の頃とし、田面に足跡が軽く付く程度とします。中干し後は走水を1～2回行い、その後は間断かん水で管理します。

2 病虫害防除と追肥

葉いもちやウンカ類が発生しやすい時期のため、ほ場観察と予察情報に注意し、防除を行います。追肥は「ヒノヒカリ」では幼穂長が1cmの頃に行い、葉色により施肥量を決めます。「おてんとそだち」の施肥量はヒノヒカリより少なめに行います。ヒノヒカリでは窒素の追肥量が多いと食味の低下や倒伏が懸念されますが、窒素が不足しても出穂後の高温で白未熟粒の発生が助長されることがあるので、適正な施肥量に注意します。

◆大豆

1 ほ場準備と播種

苦土石灰で酸度矯正を行い、元肥量は前作を考慮して決めます。発芽が揃うよう、耕耘は丁寧に行い、ほ場周囲には排水溝を設置します。播種は発芽安定と鳥害軽減のため、薬剤を粉衣し、条間60～70cm、株間10～20cm位で行い、覆土は2～3cmにします。播種が7月下旬以降になる場合は密植にします。

(荒砂 英人)

施設野菜

◆夏秋野菜の高温対策

中山間地域の露地きゅうり、雨よけトマト、ピーマンなどでは本格的な収穫時期となります。

雨よけ栽培では梅雨明け後の高温対策が重要です。日中はハウスをできる限り解放し換気に努めるとともに、寒冷紗などを利用し、2割程度の遮光を行い、ハウス内の気温低下や果実や葉の温度が上がらないように管理します。

特に曇雨天後の晴天日は萎れやすくなるため、早朝からのかん水や翌日が確実に晴れの場合は前日の夕方のかん水も効果的です。

なお、薬剤散布は高温時に行うと葉焼け等の障害が発生しやすいので、日中高温になる時間帯を避けて、午前中の早い時間帯か午後温度が低下する時間帯に行います。

◆いちごの育苗管理

年内の収量を確保するため、7月中旬までには採苗を終え良質苗の生産に努めましょう。採苗後のかん水は、晴天時は早朝に行いますが、乾燥するようであれば午後にも行い、夜間に過湿にならない程度にかん水します。

子苗時期の施肥量は多すぎないように注意し、施肥は鉢底から根が確認できる時期から行います。

育苗期の管理として病虫害防除が重要となります。炭疽病は定期的な薬剤散布を行い、発病が疑われる場合には周辺の株とあわせ直ちに処分してください。ハダニについても発生を確認したら直ちに防除を行うなど徹底した管理を行います。また、うどんこ病予防のためにも育苗床での徹底防除が重要となりますが、肥料であるケイ酸カリを1株あたり2～3g施用することにより本ぼでの発病を抑制する効果があります。

(黒木 正晶)

葉茎菜類及びいも類

◆さといも疫病への対策

近年、さといもの疫病が各地区で多発し、深刻な被害が出ています。新しい葉の展開に併せ、定期的な予防を続けましょう。

◆秋冬野菜の土づくり

秋から冬にかけて栽培する野菜の収量・品質を高めるためには、夏場のほ場管理が重要です。今月は土壌pHの矯正や深耕、堆肥等の有機物の投入、緑肥栽培による土づくりを行いましょう。

◆かんしょ

4月植付けのマルチ栽培が収穫期となります。植付け後110～130日が収穫の目安ですが、90日を経過したら試し掘りを行い、芋の肥大状況を確認して収穫を始めてください。収穫が遅れると皮色や形状が悪化するため適期に収穫をしましょう。

◆さといも

肥大には土壤水分が大きく影響します。梅雨明け後は、さといもの葉面積が日増しに大きくなり、蒸散量も併せて増加するため、早めのかん水を心がけ草勢の維持に努めてください。

3月植えの石川早生は下旬から収穫期となります。試し掘りを行い、肥大状況を確認してから収穫を始めてください。また、収穫が遅れると「水晶芋」が発生し、品質低下につながるため、収穫は計画的に行い、8月中旬には終了するようにしましょう。

中生種は7月上旬から子芋の肥大、孫芋の着生時期となります。梅雨明け頃を目安に追肥・土寄せを行ってください。また、中生種は乾燥による芽つぶれ症状が出やすいため、適宜かん水を行い、品質向上に努めてください。

◆しょうが

今月上旬が1回目の追肥適期です。10aあたり窒素成分で3～5kgを施用し、追肥効果高めるために、土寄せも行ってください。また、梅雨明け後は急激な気温の上昇と乾燥が予想されるため、早めのかん水を行います。なお、畝間かん水をする場合は滞水しないよう注意しましょう。

(杉村 幸代)

果 樹

1 常緑果樹

◆かんきつ全般

今年はミカンハダニとかいよう病の発生が多いため薬剤散布による防除を行いましょう。また、かいよう病が発生した枝葉は伝染源となるためできるだけ除去しまししょう。

雨が多くなると、黒点病の防除が特に重要になります。250mm程度の雨量を目安に薬剤散布を行いましょう。

◆温州みかん

7月中旬から収穫前までが仕上げ摘果の時期になります。

極早生温州では、7月10日の果実横径は、38～48mmが理想です。今年は全体的に結果量が少なく、肥大が進むことが予想されるため、仕上げ摘果を遅らせましよう。

結果部位によっても摘果時期が異なります。樹冠下部は早めに、樹冠上部は遅めに摘果することで適正な肥大を確保しまししょう。

◆完熟きんかん

開花期のアザミウマ類や灰色カビ病の発生は果実品質を大きく低下させます。開花期の防除を実施するとともに、枝をゆすって、花びら落としを行いましょよう。

満開期にビニル被覆を行った園地では、高温による結果不良が出始めるので、早めに除去しましょよう。

◆マンゴー

7月下旬以降の剪定は第二新梢の充実が悪くなることから、翌年の花芽形成を悪くすることが報告されています。早めに剪定を行うように心がけましょよう。どうしても下旬以降の剪定になる場合は、夜間24℃設定で加温し、昼間も換気開始温度を30℃に設定することで、施設内の温度を確保し、新梢の発生と充実促進を図りましょよう。晴天日の昼間は、高温対策としてサイドを開けて通気を確保しましょよう。

既に剪定が終了し、新梢が発生している園では、葉面散布や発根促進剤の利用、新梢の整理により、新梢の充実促進を図りましょよう。

施肥は土壌分析の結果を見ながら、必要に応じて実施しましょよう。

(鈴木 美里)

花 き

◆キク共通

梅雨明け後は曇雨天から一転し、日差しの強い日が続きます。葉焼け等が発生しやすい時期になるため、本ぽでは遮光や換気を行い、葉温低下を図りましょよう。親株ほ場では防除を徹底し、苗とともにアザミウマ類やダニ類、白さび病を本ぽに持ち込まないように気を付けましょよう。

◆夏秋ギク

「精の一世」の8月出荷では花芽分化・発達を促すために、消灯後から11時間日長でシェードを実施してください。また、高温により草丈の伸長不良や開花遅延、奇形花の発生等が懸念されますので、日中は十分な換気を行いましょよう。

「フローラル優香」は消灯後から12時間日長で2週間程度のシェードを実施してください。高温や消灯遅れ、多肥により貫生花の発生が多くなるので、適正管理に努めましょよう。

◆秋ギク電照

「神馬」系品種は、穂の冷蔵期間が長くなると定植後の活着が悪い傾向にあり、幼弱性を獲得する恐れがあるので冷蔵期間は3週間を目安としましょよう。「神馬66-4」「神馬2号」は高温に遭遇すると腋芽が出にくくなり、穂が不足する場合がありますので、親株床はできるだけ涼しくし、親株の株数も余裕を持って植え付けを行いましょよう。

◆洋花類

秋に定植するほ場の土壌診断を必ず実施し、分析・診断結果に基づいた施肥を行いましょ
う。また、改良太陽熱消毒等の土壌消毒を実施し、連作障害の回避に努めてください。トル
コギキョウ、デルフィニウムは冷房施設等を利用した育苗期になりますので、適切な温度管
理を実施し、早期抽だいやロゼット防止に努めてください。

◆ホオズキ

8月出荷分は上旬から段階的にピンチ・着色のためのホルモン処理を実施してください。
各種病害虫の防除はホルモン剤散布の1週間前までに徹底して実施して下さい。ホルモン剤
散布後の高温は色ムラ発生の原因になるので、散布はできるだけ涼しい早朝に実施し、散布
後数日は必ず寒冷紗により遮光して下さい。

◆露地花木類

定植間もないシキミの幼木や収穫中のキイチゴ等は梅雨明け後の急激な高温・乾燥により
枯死する危険性があるため、かん水の実施や株元への敷きわらなどでマルチングを実施し、
極度な乾燥を防ぎましょう。

(中村 広)

畜 産

◆家畜

今後、梅雨が明け本格的な夏を迎えると、家畜や家禽の生産性が低下する時期に入ります。
畜舎への風の通しを良くするとともに、換気扇や細霧装置を稼働し、暑熱対策を十分に行い
ましょう。また、畜舎内への直射日光を遮蔽するために、寒冷紗を設置したり、屋根散水や
屋根への石灰塗布、白ペンキを塗ることも有効な暑熱対策となります。

乳牛に関しては、暑熱ストレスの影響が高まる時期です。ヒートストレスメーターの温湿
度指数（THI）を毎日チェックしましょう。牛舎ファンを常に回し、全ての牛に直接風が
当たるようにします。夏場は、多くの水が必要となるため、いつでも新鮮な水が飲めるよ
うにしてください。また、子牛にとっても水は大事です。3ヶ月齢の子牛でも1日に10Lの
水を飲みます。子牛用の水槽には、踏込消毒槽等の底が浅いもので飲水させると清掃も容易
で、子牛も水を飲みやすくなります。

豚・鶏では、出荷前の肉豚やブロイラーの事故率の上昇を抑制するために、飼養密度を低
くし、飼養環境の改善を図りましょう。また、寒冷紗の設置により直接日光を遮り、換気扇
やダクト、あるいはミスト機による散水で畜舎内温度の上昇を抑制します。さらに、飼料の
腐敗には十分に注意するとともに、ウォーターカップやピッカー等の飲水の確認も十分に行
ってください。

◆飼料作物

牛の粗飼料では、サイレージが腐敗しやすい時期になります。サイレージの色が黒っぽかったり、手で触って熱く感じる場合やいつもと臭いが違う場合は要注意です。絶対に給与しないでください。

(三角 久志)

工芸作物

◆茶

1 三番茶の摘採

二番茶の摘採から35日程度で三番茶の摘採期となります。この時期は、新葉の硬化が早いため摘み遅れに注意します。荒茶の価格と経費を考慮し、計画的で無理のない摘採に努めます。

2 病虫害の防除

新芽生育期に発生が多い害虫は、チャノキイロアザミウマ、チャノミドリヒメヨコバイとハマキムシ類です。病害では、摘採後、速やかに輪斑病等の防除を実施します。

また、県内の茶園でもチャトゲコナジラミの発生が拡大しています。この害虫は茶の新芽生育期に成虫となり茶園を飛び回るため、茶園や製茶工場の生葉置き場を観察します。なお、本虫に対する問い合わせ等は最寄りの農業改良普及センター等へ連絡してください。

3 更新茶園の整枝

一番茶後に中切りした茶園は7月上旬と8月上旬に2回の整枝を行います。また、二番茶後に中切りや深刈りした茶園は8月上旬までに1回の整枝を行います。整枝はいずれも中切りや深刈りの位置から3～5cm上げた位置で実施します。本年は一番茶萌芽時期が7日前後遅れたため、更新茶園の整枝作業も遅れることが予想されます。適期を逃さないよう注意しましょう。

4 幼木園の管理

定植当年の露地苗は根域が浅いため、梅雨明け後の干害に注意します。また、ペーパーポット苗でも、植え込みが浅くポット上部が地表から出ている場合は、ポット内の土壌が乾燥し、苗が枯死することがあります。いずれも土寄せや敷きワラ等を行い土壌の乾燥を防ぎます。

1～2年生の幼木園は台風にも備え7月中～下旬に徒長枝の摘心や整枝を行います。

また、ソルゴーの間作は防風効果が高いので台風対策に有効です。播種は、必ず7月上旬までに行います。

(黒木 清人)

◆しいたけ

伏込み地の湿度管理と高温対策を徹底し、健全なほだ木づくりに努めましょう。

1 裸地伏せの場合

笠木を厚さ30cm程度に補充し、直射日光による高温障害に注意するとともに、周囲の刈払いを実施し、風通しを良くしましょう。

2 林内伏せの場合

直射日光が当たる箇所には、笠木の補充や遮光ネットを設置しましょう。特に湿気が多い場合は、ほだ木の積み替えや天地返しを行うとともに、周囲の草刈りを実施し、風通しを良くしましょう。

3 人工ほだ場の場合

特に高温・乾燥の害を受けやすいため、遮光ネットによる日陰の調整や散水等により、温度と湿度の管理を徹底しましょう。

(永野 学)

◆たばこ

今月は総掻きが主な作業です。

1 総掻きは未熟葉の収穫を避けるため、上位本葉の成熟を確認して開始しましょう。成熟の目安としては葉色だけではなく、葉や中骨が下記の状態になっているか確認して下さい。

- ・葉の表面が凹凸になり葉先が枯れる。
- ・葉全体が下方に巻き、葉柄部が下った時（肩を落す）。
- ・上位葉（4枚目）の中骨が白化し、中骨の表面が平らとなり中心に溝ができ、ポキッと明音がして折れやすくなる。

総掻き時の注意点として

- ・着位区分は徹底しましょう。
- ・持てない流れそうな合葉の拾い取りを確実にいき、収量確保に努めましょう
- ・上葉に標準的な心止めをした作は3枚程度を目安に区分収穫し、包内品位を高めましょう。
- ・立枯葉は活力のあるうちにグジリ取りを行いましょう。乾燥は当日吊込みが良いです。

2 残幹は土壌中の病原菌密度の増加につながるため、収穫終了後は早期に除去し、ほ地外へ持ち出して、耕種的防除に努めましょう。

3 異物・異臭・虫害発生防止のために作業場の定期的な確認と清掃を行いましょう。また、早期販売に向けた出荷の事前確認を行いましょう。

(宮崎県たばこ耕作組合)

内容の詳細について

7月の天候と農作業の詳細内容について。執筆は県農業経営支援課及び森林経営課、宮崎県たばこ耕作組合が担当しています。各作物の病害虫の防除対策、気象災害の事前事後対策等の詳細は最寄りの支庁・農林振興局（農業改良普及センター）へ。

☆「今月の天候と農作業」はホームページにも掲載しています。

(<http://nougyoukishou.pref.miyazaki.lg.jp>)

向こう1カ月間における農作物の主な病害虫の発生量と防除対策

作物名	病害虫名	発生量	発生状況と防除対策
早期水稲	葉いもち 紋枯病	やや少 並	葉いもちが発生している場合は、穂ばらみ期から穂揃期の防除を確実に 行います。
	※ ツマグロヨコバイ セジロウンカ ヒメトビウンカ 斑点米カメムシ類	並 やや少 並 やや多	カメムシの発生が、平年よりやや多い状況です。カメムシによる被害は 早期米の等級格下げの重要な要因のため発生に注意し確実に防除します。 穂揃期とその7～10日後の2回防除を徹底します。防除後も残存虫が確認 される場合は、さらに3回目の追加防除を行います。
普通期水稲	葉いもち	並	本田での初発生に注意し、早期防除に努めます。 移植時に箱施薬をしていないほ場では、防除が手遅れにならないように 注意します。
	ツマグロヨコバイ セジロウンカ ヒメトビウンカ コブノメイガ ニカメイガ スクミリンゴガイ	並 並 並 — — やや少	海外飛来性害虫（セジロウンカ、トビイロウンカ、コブノメイガ）の今 年の飛来数は少ない状況です。飛来状況については、病害虫防除・肥料検 査センターのホームページ等で随時提供していますので、確認ください。 ニカメイガは近年飼料イネにおいて被害が広範囲で確認されています。 7月上旬中頃の発蛾最盛期に粒剤を施用するのが効果的です。 スクミリンゴガイの生息数が多い場合は、捕殺するか粒剤の水面施薬を 行います。
野菜・ 工芸作物	アブラムシ類 ハスモンヨトウ タバコガ・オオ タバコガ	やや少 並 並	アブラムシ類は、各種のウイルス病を媒介しますので育苗期から防除し ます。育苗施設は野外からの飛び込みを防ぐために、防虫ネット等で被覆 すると効果的です。 ハスモンヨトウは、ふ化直後に集団で加害し、分散してからでは薬剤が 効きにくいので、この時期の発見に努め、若齢幼虫期に防除を行います。
ウリ類	黄化えそ病 (MYSV)	—	媒介虫であるミナミキイロアザミウマの生息密度を抑制するため、定期 的に防除するとともに、ほ場周辺の除草に努めます。本病と疑われる症状 が発生した場合は、最寄りの農林振興局・西臼杵支庁（農業改良普及セン ター）または病害虫防除・肥料検査センターまで連絡をお願いします。
果樹全般	果樹カメムシ類	やや少	平成29年の越冬量は平年より少なく、6月中旬までのフェロモントラッ プへの誘殺数は少なく推移しています。 成熟の早いナシ・ブドウ等の果樹類を集中して加害する恐れがあります ので、園内外を見回り、早期発見・早期防除に努めます。
カンキツ (露地栽培) ※	黒点病	並	黒点病は、降水量が多いほど発生が多くなるので、前回の防除から積算 降水量250mmを散布間隔の目安として薬剤散布を行います。
	※※ かいよう病	やや多	かいよう病の発病した枝葉は伝染源となるので、できるだけ除去し、園 外に持ち出し適切に処理してください。
茶	ミカンハダニ	多	6月中旬のミカンハダニの生息密度が、過去10年で最も高くなっている ため、6月26日付けで注意報を発表しております。梅雨明け後の高温乾燥 は増殖に好適な条件となりますので、発生初期段階（寄生葉率30%、1葉 当たり雌成虫数0.5～1頭）での防除を行います。
	炭疽病 カンザワハダニ チャノコカクモンハマキ チャハマキ チャホホガ チャノミドリヒメヨコバイ チャノキイロアザミウマ クワシロカイガラムシ	やや少 並 並 並 やや少 並 少	二番茶残葉に炭疽病の発生が見られる茶園では、三番茶でも多発する恐 れがあるため、三番茶萌芽期から1葉期に重点的に防除します。 カンザワハダニ、チャノキイロアザミウマは、多発してからでは防除が 困難になるので早期発見・防除に努めます。 チャノコカクモンハマキとチャハマキの防除適期は、発蛾最盛期の7～ 10日後で両種の発蛾最盛期の差が10日以内であれば同時防除が可能です。 クワシロカイガラムシの防除適期は、幼虫ふ化最盛期です。時期を逸す ると防除効果が低くなりますので、ふ化状況を確認してから薬剤散布を行 います。

1) 「発生量」は、過去10年間の発生量と比較して、今後の発生量がどの程度になるか予測したもので
す。

2) ※※は注意報、※は防除情報を発表していますので、詳しくはホームページをご覧ください。

3) 病害虫防除・肥料検査センターのホームページアドレスは、<http://www.jpnp.ne.jp/miyazaki>です。

